東日本大震災・緊急消防援助隊派遣を終えて

【所　属】　　寝屋川消防署

【階　級】　　消防司令補

【名　前】　　向井　重夫

私は震災発生から 2 日後の 3 月 13 日に緊急消防援助隊として、岩手県大槌町に派遣されました。大阪府隊の消防車両が隊列を組み被災地へ向う道中、沿道の被災者が私たちに深々と頭を下げられる姿を見て、「何とかしてあげなければ」と感じると同時に胸が詰まる思いでした。

活動場所である大槌町に到着し、私の目の前に飛び込んできた景色は、町全体が瓦礫と化し、一面が見渡せる衝撃的な光景でした。私は救急小隊長として、部隊長を補佐する為、指揮本部で大阪府の救急隊に出動指令を出す役目でした。地元の県立大槌病院は壊滅的な被害を受け機能しておらず、傷病者が発生すれば隣町の釜石病院へ搬送していました。しかし釜石病院も通常の 10 パーセントしか機能しておらず、すでに傷病者が溢れている状態でした。その知らせを受け、直ちに 10 台余りの救急車を釜石病院へ派遣しました。大阪府隊の救急車が釜石病院へ到着したとき、病院関係者は涙し拍手で迎えたそうです。その甲斐もあり、「翌日には何とか病院の機能も回復します」と、院長の言葉に一同皆安堵し、枚方寝屋川救急小隊も釜石病院から片道約 100 キロに及ぶ盛岡市内までの転院搬送を行いました。

活動最終日、被災地検索の為、私たち救急小隊に同行してくれた地元の消防職員がかすれきった声で、「ここが私の大槌消防署です。」と指をさした先には、津波に破壊され、言われなければそれとわからない程、瓦礫と化したコンクリートの塊しかありませんでした。自分も被災者であり必死に災害と戦っている消防人に対して「頑張ってください」の言葉が私には、とても軽く感じられ、すぐに言葉が出ませんでした。そして私は「遠慮なく何でも言って下さい」と言うのが精いっぱいでした。

被災地はまだまだ支援が必要です。そして一日も早く復興されることを心から祈ります。